

A painting of a woman in a white dress running on a beach. The sun is bright and yellow in the blue sky. The background shows a blue sea and a yellow beach.

三大学
サマー
コンサート

2015年8月26日

同志社大学寒梅館ハーディーホール

Program

～エール交歓～

1st Stage

立教大学グリークラブ

混声合唱『愛歌曲集』より

1. そのひとがうたうとき

2. みやこわすれ

3. きみうたえよ

4. 前へ

指揮：津久井 豊

ピアノ：若井 瞭

2nd Stage

金城学院大学グリークラブ

Andre Caplet の世界

『MESSE A TORIS VOIX』より

1. Kyrie eleison

2. Gloria in exeelsis Deo

5. O Saltaris

作曲：Andre Caplet

指揮：小原 恒久

3rd Stage

同志社グリークラブ

男声合唱とピアノのための

『初心のうた』

1.初心のうた

2.自由さのため

3.とむらいのあとは

4.でなおすうた

5.泉のうた

作詞：木島 始

作曲：信長 貴富

指揮：沖村 明彦

ピアノ：松井 萌

4th Stage

合同ステージ

アラカルトステージ

1.Salve Regina

2.Ride the Chariot

3.Ave Maria

指揮：伊東 恵司

-1st Stage-

立教大学グリーンクラブ

混声合唱『愛唱曲集』より

指揮：津久井 豊

ピアノ：若井 瞭

◆曲目解説

そのひとがうたうとき（作詞：谷川俊太郎／作曲：松下耕）

兵庫県立芦屋高等学校コーラス部 OB 会の委嘱作品。1999年に初演が行われた。今回演奏するのは混声版だが、混声版のみでなく男声版、女声版とすべての歌唱形態で出版されている。この作品のテーマは2つあり、1つ目のテーマは「祈り」である。人と人との間に築かれる「平和」を祈る、「平和への祈り」がこの作品には込められている。そしてもう1つのテーマが「うた」の持つ力だ。平和を祈る人々の「うた」はきっとどこまでも届いていく。そのようなメッセージがこの作品には込められているのではないだろうか。

みやこわすれ（作詞：野呂昶／作曲：千原英喜）

この曲は、混声合唱組曲「みやこわすれ」の終曲である。みやこわすれとは、春から初夏にかけて青紫や白など様々な色に咲く、菊に似た形をした花のことである。花の名前の由来は、鎌倉幕府討幕を目指したものの承久の乱に敗れ、佐渡に流刑となった順徳上皇が、この花の美しさでかつて暮らしていた都への思いを紛らわしていたという伝えからきている。上皇は20年余りを佐渡で過ごし、46歳で絶食の末自害した。二度と都に帰れない運命、ならば故郷を忘れようとしても忘れることの出来ない彼の切ない思いが迫ってくる曲である。

きみ歌えよ（作詞：谷川俊太郎／作曲：信長貴富）

この曲は2000年に作曲された合唱組曲「新しい歌」からの一曲である。最初は男声合唱曲として作曲され、初演後まもなく混声合唱曲に編曲された。ちなみに男声版は東京六大学合唱連盟定期演奏会の合同ステージで初演されている。「きみ歌えよ」に関しては女声版も存在するが本日は混声版を演奏する。3連符のリズムが実に軽快で思わず一緒に歌い出してしまいそうな曲である。

前へ（作詞・作曲：佐藤賢太郎〈Ken-P〉）

この曲は、東日本大震災の被災者の方々にエールを届けようとカワイ出版が立ち上げた「歌おう NIPPON」プロジェクトのために書き下ろされた。佐藤賢太郎氏は「流れる時間や音楽から取り残され、自分の心までも止まってしまったかのように感じる時があります。そんな心がまた動きはじめるようにという願いをこめて、この合唱曲をつくりました」と語る。「過去を見つめ、今を感じ、そしてもう一度未来に向かう」というメッセージから人生を歩んでいく勇気をもたらえる一曲である。

-2nd Stage-

金城学院大学グリーンクラブ

Andre Caplet の世界

『MESSE A TORIS VOIX』より

◆曲目解説

作曲者：Andre Caplet

指揮者：小原 恒久

Kyrie eleison

ミサ通常式文（1年を通じて同一の式文で歌われる）の『憐れみの賛歌』で、主に憐れみを求める祈りの曲。ミサ典礼における聖歌の一つで「キリエ・エレイソン Kyrie eleison（主よ、あわれみたまえ）」の意。また、五つの通常文聖歌からなる多声ミサ曲の第1章をいう。他の4章がラテン語で歌われるのに対し、この章のみギリシア語。三声のハーモニーがきれいな曲である。

Gloria in excelsis Deo

ルカによる福音書2章14節の言葉で、御子イエスの誕生を羊飼いに伝えるために天使が歌った歌である。現在は神への栄光の賛歌として広く知られている。タイトルの「Gloria in excelsis Deo」とは、「天のいと高き所には、栄光神にあれ」という意味があり、「天国では、神は誉れ高き、栄光を受けるべきお方だ」と歌われている。神への親愛が高まっていく曲調や、曲に込められたかみへの栄光を強く感じることができる。

○ Salutaris

タイトルの「○ Salutaris」とは、「ああ、救いのいけにえ」という御子イエスへの呼びかけであるが、この歌詞はイエスの後ろに神をも見て祈っている。私たちは四方から問題が押し寄せてきたとき、問題だけに目を向けがちである。しかし、四方がふさがっていても、上は開いている。この曲には、「苦しいときこそ天を仰ぎ、救いを求めなさい」というメッセージが込められており、別の視点から前向きに物事を捉えてみようという気持ちにさせてくれる曲である。

-3rd Stage-

同志社グリークラブ

男声合唱とピアノのための 『初心のうた』

作詞：木島 始 作曲：信長 貴富

指揮：沖村 明彦 ピアノ：松井 萌

◆曲目解説

初心のうた

冒頭の象徴的なピアノによって、〈初心のうた〉は暗闇の世界から始まる。真っ暗の中で光を必死で見つけようとする気持ちが同時に、曲の勢いにもエネルギーを与えていく。そして、不安や希望が混在した「未来」という光を手にして揺らめく人の心が印象的な曲。

自由さのため

微風を感じさせるリズムで進行していく〈自由さのため〉は、自己を奮い立たせる曲である。歩みを止めないピアノが支えとなり「自己」に打ち勝ちながら、爽快に歩みを進めて行く様が描かれている。

とむらいのあとは

この組曲の中で唯一のアカペラ曲である〈とむらいのあとは〉は、死者への思い出に浸っているような、落ち着いた速さで進行していく。温かみのあるメロディの中に、死者の分まで「ゆめみよう」と新たな一歩を踏み出す様子が感じられる曲。

でなおすうた

〈でなおすうた〉で様々な地から帰還した魂は、戦争と無縁のものへ帰っていく。新たな希望を胸に抱いて歩いていく過程で、温かさは徐々に増していく。だが、積み上げてきた希望は「帰還したはずだった」の一言で崩壊する。

泉のうた

〈泉のうた〉は「未来」に一筋の光を与え、この組曲全体を総括する曲である。歩み続けてきたその一步一步が「道」となり、その歩みは曲全体に色合いを加えていく。そして、自分だけの泉を探しに、人々は再び歩みを進めていくのであった。

-4th Stage-

合同ステージ

アラカルトステージ

指揮：伊東 恵司

◆曲目解説

Salve Regina

この曲の作曲家であるミクローシュ・コチャール（1933~）は、ハンガリーの著名な作曲家であり、特に彼の合唱作品は日本を含めた世界中で親しまれている。歌詞はカトリック教会での伝統的な祈祷文であり、「聖務日課」と言われる日々の祈りの中で、交唱の形式で歌われている。日本のカトリック教会でも「元后あわれみの母」として親しまれている他、合唱曲の歌詞や映画「天使にラブソングを」でも取り上げられる等、多方面で用いられている。

本曲では、詩に込められた讃美や祈りの思いと、作曲家による美しい音色への追求が見事に融合した作品となっている。

Ride the Chariot

この曲の題にもある“Chariot”「戦車」は現代の物ではなく馬によって曳かれる戦車の事であり、黒人霊歌の曲では度々登場する言葉である。旧約聖書で預言者エリヤが火の戦車によって天へと引き上げられる話があり、この火の戦車が本曲でも出てくる“Chariot”である。黒人霊歌は西洋とアフリカの音楽が混合した独特の魅力を持つが、その背景には奴隷貿易や黒人の過酷な生活等がある。黒人はその中で歌に希望を見出そうとし、エリヤのように自分達も主に迎えられたいという祈りを込めた。

本曲は、そうした背景を吹き飛ばすかのような、快活な曲調とリズムが魅力である。男声合唱曲では最もメジャーな曲の一つであるが、改めてこの曲の魅力を感じて頂きたい。

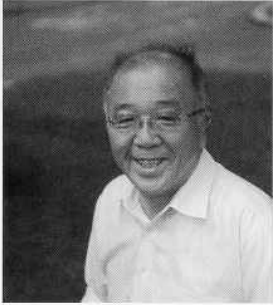
Ave Maria

フランツ・ビーブル（1906~2001）の作曲によるこの曲の歌詞は、“Angelus”「お告げの祈り」と言われる祈祷文から取られている。この祈りは毎日朝、昼、夕方の三回行われ、本曲も前半部分の歌詞が、ソロを挟みながら三回繰り返される。曲中は小編成の trio と大編成 chorus の二群に分かれて演奏される。二つのアンサンブルが対比し合い、互いに絡み合いながら、聖母マリアへの讃美へと昇華していく。

なお今回の演奏会では元々の同声合唱ではなく、男声と女声による混声合唱によって演奏される。三団体

Profile

指揮者 小原 恒久 (金城学院大学グリークラブ)



愛知県立芸術大学声楽科卒業。名古屋オペラ協会公演、名古屋市文化振興事業団公演等、オペラ、オペレッタの主要な役で多数出演。

金城学院グリークラブの指導は40年にわたり、指揮者として各種合唱コンクールに受賞多数のほか、10回にわたる海外公演を行い各地で好評を博す。

現在、金城学院高等学校非常勤講師、名古屋オペラ協会運営委員長。

ヴォイストレーナー 宮木 令子 (金城学院大学グリークラブ)



ウィーン国立音楽大学声楽科卒業。同学内オーストリア民俗音楽研究所において修士課程修了。

在学中よりウィーン市及びオーストリア国内各地での演奏会に出演。第39回リュブリアーナ国際音楽祭(スロヴェニア共和国)の招聘による演奏会出演。

地元名古屋においてリサイタルを開く他、日本各地で演奏会や発声法講習会講師として招かれている。

現在、金城学院高等学校教諭、アンサンブルドーナウ主宰。

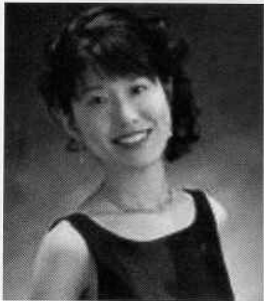
技術顧問 伊東 恵司 (同志社グリークラブ)



京都市在住。1990年同志社大学を卒業(ポストモダン芸術論を専攻)。同志社グリークラブ学生指揮者として福永陽一郎に師事。'90年以降多数の合唱団で合唱指導を開始。'99年から出場した全日本合唱コンクールでは「なにわコラリアーズ」の10年連続金賞を始め、複数の合唱団で21個の金賞(11度の特別賞)を受賞。宝塚国際室内合唱コンクール20周年記念大会では海外の団体をおさえ総合グランプリを獲得している。現在は、全国各地で審査員や合唱指導を引き受けるほか、「アルティ声楽アンサンブルフェスティバル(京都)」「コーラスメッセ(大阪)」等の新規合唱フェスティバル、学生指導者宿舎の企画や主催、合唱を使った多彩な仕掛けを行っており、広く各方面からの注目を浴びている。日本合唱指揮者協会関西支部事務局次長、21世紀の合唱を考える会合唱人集団「音楽樹」会員。

2011年「学生合唱のためのスチューデントソングブック」(カワイ出版・共著者:名島啓太)を上梓。近年では「みなづきみのり」のペンネームで作詞活動を展開。松下耕、高嶋みどり、千原英喜、信長高富、相沢直人、松本望、北川昇…等の作曲家により合唱曲が多数作られている。

ピアニスト 松井 萌 (同志社グリークラブ)



京都市立音楽高等学校（現・京都市立京都堀川音楽高等学校）、同志社女子大学卒業。新島賞受賞。京都市立芸術大学大学院修士課程修了。仙田緑、鶴田裕子、古新薫、阿部裕之、谷千鶴、松田康子、坂井千春の各氏に師事。2001年京都ピアノコンクール本選D部門銅賞、第二回大阪国際音楽コンクールピアノ部門高等学校の部奨励賞、第11回日本クラシック音楽コンクール兵庫地区本選高校の部ピアノ部門好演賞、第7回ショパンの会〈祝・21世紀〉コンクールピアノ演奏部門Cクラス奨励賞。2009年青山音楽記念館にてソロ・リサイタルを開催。松井彩との姉妹デュオ（Piano duo Sonare）にて、第4回かやぶき音楽堂デュオコンクール第2位。京都音楽家クラブ、日本音楽表現学会会員。京都橋大学レッスン講師、平安女学院大学嘱託講師（ピアノ）、京都市立芸術大学音楽学部音楽教育研究会「京都子どもの音楽教室」特別研究員。

ヴォイストレーナー 北村 敏則 (同志社グリークラブ)



京都市立芸術大学声楽専攻卒業。同大学院修了後ウィーン留学。音楽学部賞及び大学院賞を受賞。第2回日本シューベルト協会(J.S.G)国際歌曲コンクール第1位および聴衆審査特別賞受賞。第6回ボルツァーノ(北イタリア)歌曲コンクール第1位及びアダ・ヴェルバ賞受賞。第1回青山音楽賞、京都市芸術新人賞受賞。現在、京都市立芸術大学准教授、関西二期会会員、日本シューベルト協会会員。

ヴォイストレーナー 石原 祐介 (同志社グリークラブ)



声楽家、合唱指揮者、ヴォイストレーナー。

京都市立芸術大学、同大学院音楽研究科声楽専攻を卒業、修了。卒業時に音楽学部賞を受賞。第21回飯塚新人音楽コンクール第2位。世界合唱連合(IFCM)主催 World Youth Choir、World Chamber Choir 元日本代表メンバー。

声楽を灘井誠、山口はやとの各氏に、指揮法を青木邦雄氏に、合唱指揮を吉村信良氏に師事。また、T. カリュステ氏、E. オルトナー氏、松原千振氏による合唱指揮マスタークラスを修了。

現在、神戸市混声合唱団コンサートマスター。京都市立芸術大学非常勤講師。JCDA 日本合唱指揮者協会会員。